



2021年7月25日発行
公益財団法人 大川美術館
〒376-0043 桐生市小曾根町3-69



佐々木耕成《作品》2015年 個人蔵

ことば 130

「どっちかって言えば生き方の問題ですね。
だから「何々を描く」とか「何々を表現する」っていうことじゃなくて、
自分の生き方を記録してると思うんですよ」

(「佐々木耕成インタビュー」[2014年11月-2018年2月]、
『変革の煽動者 佐々木耕成 アーカイブ』、熊本県立美術館、2018年)

Kiryu POP

－ 軽快に越境するアーティストたち－

田中 淳

アーティストの越境

昨年1月に、桐生出身、もしくは桐生を活動の拠点にしているアーティストたちによるグループ展「桐生のアーティスト2020」を開催した。参加願った8名のアーティストたちの作品は、いい意味でいずれも「保守的」(conservative)であった。抽象、具象にかかわらず、またテーマも表現もそれぞれちがっていても、絵画、もしくは平面、そして彫刻、立体表現に、長年にわたり真摯に向きあっている。今でも、いや今だからこそ、絵画(平面)、立体の表現の可能性を信じて、創作をつづけているアーティストたちである。

さて、今回の企画展「桐生のアーティスト2021 Kiryu POP」に参加願った桐生のアーティストたち10名は、いずれも絵画、彫刻という既存の美術(art)の枠組みから、はじめから無関係というように、そしてほとんどが自覚しないまま、気負いなく越境している。ボーダーレスなのだ。その姿は実に軽快でカッコイイ。

たとえば、出品アーティストのひとりガラス作家の小林大輔がいる。ガラス工芸というと、皿、グラス、器等々の生活のなかの「用の美」を競う世界だが、それはそれとして、「用の美」



小林大輔



守亜

からはなれて、ガラスを素材にして動物などをモチーフにオブジェを造りつづけている。そのオブジェは、ガラスの透明な色彩とともに存在感があり、置物をこえた立体作品でもある。さらに華やかなグラスセットのなかに、同じ柄の動物のオブジェが闖入したようなセットの作品もある。工芸からフィギュアへの越境、あるいは融合である。

一方で、「動物造形作家」を自称する守亜は、いわゆるフィギュア造りのアーティストである。小動物、爬虫類、怪獣、古代魚まで、なんでも造ってしまう。しかも、小さくても形も色彩も実に精巧で、ときどきそのリアリティーにおどろかされる。その点からも守亜にとって、創作のフレームワークなどはないはずで、まったく自由である。しかし、小林大輔とは逆に、ひとつの伝統的な枠組みのなかに外から、しかも独学で入り込んでいる。その枠組みとは、根付の世界である。江戸時代からある実用から趣味にいたる根付は、伝統といえる型があり、今日でも「現代根付」としてファンをもっている。そこに、堅い木、象牙、金属といった従来材料ではなく、樹脂でできた根付をつくって発表している。これもまた、外から型の世界への越境である。

いま越境ということで二人を例にあげたが、つづいて唐澤龍彦、モニョチタポミチ、寺村サチコ、nemographics(根本剛)、平田歩、宗像りゅうじ、ジャスミン、そして、守亜のパートナーである荒木刺身、今回の10名のアーティストたちの作品は、絵画、イラスト、映像、テキスタイル、フィギュア、インスタレーション等々、多彩な



桐生ジャンパー研究所

メディアによって、それぞれの世界をまったく自由に表現している。しかも彼らの作品は、いずれも「越境」だけではなく、ニッチなラディカリズムといたくなるように、少しトゲがあり、ちょっぴり毒をもっている。きれい、おもしろい、カワイイだけではない、それは、世の中に対する批評的な、あるいは風刺的な視点が見え隠れしているからだろう。そうした彼らの作品をもとに、ポンとはじける意味のPOPと組み合わせて展覧会のタイトルを「Kiryu POP」とした。明るく元気よくはじける彼らの作品によって、この重苦しいコロナ禍の今をすこしでも晴らすことができたと願っている。

三つの「特別出品」

そのためこの展覧会では、導入部と展示の中ほどに、三つの「特別出品」を用意した。はじめは、ヴィンテージのスカジャンである。スカジャンとは、第二次世界大戦後、横須賀に進駐した米軍兵の服として、またお土産として売られた背中に派手な刺繍をほどこしたジャンパーである。あるアーティストの方から、スカジャンの刺繍は桐生でもしていたはずだと教えられた。「織都」桐生であれば、着物や帯にわたる刺繍の技術があるはずだから、とても説得力のある話である。そこで、桐生ジャンパー研究所（代表松平博政氏）に、当時のスカジャンの出品展示をお願いした。「元祖 Kiryu POP」と称して、ポンとはじける元気のよさを当時のスカジャンにその源を見出そうというわけである。

また同じく導入部には、佐々木耕成（1928 - 2018）の遺作を加えることにした（本号の表紙）。

このアーティストは、熊本県菊池市に生まれ、戦後東京に出て武蔵野美術学校を卒業。市民と美術をつなげる前衛美術運動に参加した後、ニューヨークに移住。帰国後の1990年に黒保根に移住。以後、創作のかたわら、音楽祭を主催するなど、地域の文化活動にも貢献していた。「『何々を描く』とか『何々を表現する』っていうことじゃなくて、自分の生き方を記録してると思うんですよ」と、生前のインタビューにこたえている。この達観した明るさとエネルギーにあふれた作品こそ、まさに「Kiryu POP」の先陣にふさわしいとおもうからだ。

そして三つめは、展示の中ほどで、フォトグラファー武耕平氏にひとつのテーマによる画像の展示をお願いした。これまで国内外で多分野にわたる撮影をしてきたキャリアのある武氏は、出身地である桐生で、桐生八木節祭りも撮影している。ある日、彼から祭りの画像を見せてもらい、これを美術館の壁面一杯に投影したら迫力があることだろうと想像していた。残念ながら、実際の八木節祭りは、二年つづけて中止となってしまったが、美術館のなかで、祭りの熱気をその画像の数々で体感してもらいたいとおもって、このテーマに限定して展示をお願いした次第である。迫力のある画像のインスタレーションで、展覧会全体を力づくで底から盛り上げてもらえたらと期待している。

どうぞ、今年の夏は、大川美術館で、特別出品とともに、10名の色とりどりの作品を楽しんでください。



武 耕平《桐生八木節まつり》2018年
PHOTOGRAPHS BY KOHEI TAKE©

（大川美術館 館長）

来年はオノサト・トシノブ（1912～1986）の生誕110年にあたります。本欄では、これを機に、前号までの宮地佑治氏に続き、オノサト・トシノブと独自の交流を持った桐生の方々に、その思い出をご執筆いただきます。

渡邊保氏は、少年期、桐生市立相生中学校に学びました。オノサト・トシノブがシベリア抑留から戻りまもなく教鞭をとった時代のことです。以後、渡邊氏は桐生の地で中学校教諭となり、学校長として長年教育に携わってこられました。また、具象表現を追求した油彩画制作を続け、桐生美術協会会長を歴任されています。

奈良彰一氏は、書肆画廊 奈良書店店主。十代で上京。神保町の古書店で修行しました。評論家・久保貞次郎の勧めで版画収集と普及の活動をはじめます。1979年、桐生市文化センターの建設にあたっては、オノサト・トシノブ原画による緞帳制作に尽力しました。1981年、オノサトの代表作《銀河》（シルクスクリーン）を版元として発表。以後、郷土史研究家として幅広い文化活動を続けています。

（編集子）

小野里利信先生の思い出

渡邊 保

小野里さんに初めてお会いしたのは、私が中学校3年生の時ですから、もう六十年以上も前のことです。美術科の教師小野里利信先生として、授業を受けることになったのです。

しかし、その翌年には他の地域の中学校に転任されました。たった一年の偶然という運命の不思議を感じます。

今は記憶がかすかになりましたが、小野里先生との一年間の思い出書きをしてみます。

学校での小野里先生は、他の先生と随分異なる所がありました。

まず、生徒を「～さん」「～君」と呼ぶのです。私達は今迄「渡邊、早くしろ！」などと呼び捨てにされていたことに慣れていたので、特別に変わった先生のように思いました。

しかし「渡邊君」と呼ばれた時には、何だか自分がとても大切に扱われている様な気がして、胸が少し暖かくなったことを思い出します。

授業の中では、生徒を中心に置き課題を突き詰めて行く人でした。

ある日の授業では、教室へ入ってくると「皆さんは美術の勉強をしています。ですから美しいものを作ろうとしましょう。では、『美しい』と

いうのは、どういうことだと思いますか」と突然質問されます。

教室は一瞬静まり返りました。全員が質問された意味を理解出来なかったのです。

「では、何が美しいと思いますか、何でも思い付いたことを…」と先生の助け船。

「夕焼け」、「桜の花」「花火」…と生徒の答えが少しずつ出てきます。

先生は各個の答えに応じて更に

「どうして美しいと感じたり、思ったりしたのですか」と畳み掛けてくるのです。

こんなやり取りを今でも思い出せるのは、その授業が余程印象深かったからでしょう。

黒板に書かれたチョークの文字を忙しく写し取って、暗記暗記の連続のいつも追われている勉強とは全く異なる何かを、14歳の自分にも感じる場所があったからでしょう。

小野里先生の優しい人柄にも段々慣れて来て、緊張することなく物が言える様になったある日、生徒の一人が、

「先生、今日は天気が良いから、外で写生がいいです」と言い出しました。

すかさず他の生徒も、私も

「写生！」「写生！」と声を上げました。

「写生ですか、みんな写生が良いのですね」としばらく考えていた先生は

「では写生にしましょう、でも課題があります」と言って黒板に大きな字で「光」と書き、

「光を描いて来ましょう」と言います。その一言で、



オノサト・トシノブ《人》1949年

校庭に出て適当に怠けられるという生徒のもくろみは消え去りました。「光」と言われても、どう描いたら良いか皆目見当がつかなかったのですから。これも「美しい」とは、と質問されたことと同様に、自ら考える、課題を持つということに繋がってきます。

この時に描いた自分の作品の事は今でも鮮明に覚えています。画用紙は横使いで、上部の隅に太陽を半分程、更に太陽から放射状に直線を何本も引きました。分割された面は細かく三角形に区分し、黄や橙色赤と絵の具で埋めていく……。万華鏡の様に。

授業は次週も続き、心の写生とも言える作業に熱中し、のめり込みました。

中学校生活の中で授業中の思い出は沢山ありますが、その記憶のほとんどは「光」を描いた授業を超えるものではありません。

また、前任の先生は、自作の油彩、水彩の風景画を見本の様に前に置き指導されました。

小野里先生にも「絵を見せて」とせがみましたが、願いは届きませんでした。

今にして思えば、先生には、生徒の自由な構想の妨げとなるものを出来るだけ避けたいという思いがあったに違いありません。

新制中学校も3年を迎え1949年7月新しい校舎が竣工し、文化祭展示の中に小野里先生の作品を発見した時も、大きな驚きでした。

記憶違いもあると思いますが6～8号程の大きさで縦形、動物の頭の骨らしきものを青っぽい色で分割して、半分抽象的な作品でした。(もしかしたら、この翌年に制作された《頭脳》との関連があったのでしょうか?)

写実的な作品にしか接して来なかった私達には、とても奇妙な絵という印象でした。しかし、現在までその色や形が頭の中に残っていることは、その日に強烈な印象を焼き付けられたとの証拠でもあると思います。

時が移った現在、学校では教師が中心となっていた教え込みの学習から子どもが主体的に取り組む姿勢へと変容しつつあります。

今は、六十数年前に、変わった先生と言われた人の軌跡を辿るように、教育の流れもある様に感じています。そして、数十年前にあった掛け替えの無い出会いに、とても感謝をしています。

敢えて「私の出会ったオノサトさん」のこと

奈良 彰一

それは10代の時から・・・

挨拶ただけで話すことは出来なかった。私が高校3年生の時だ。昭和41年に卒業記念の意味もあって若さの勢いで開催した展覧会。そこへオノサトさんが来場されたことを覚えている。それは桐生市産業文化会館の画廊での事だった。高校生の個展は何故か断られたので南高卒業記念の展覧会とした。後輩の中山隆右君と友人の小林正男君、美術担任の嶋田武代士教諭の4人だった。私は油彩の具象と抽象だった。その内の県展入選作で油彩30号《工場》1点のみが今も手元にある。

高校生の展覧会で案内状を出したものの、まさか来てくれるとは驚きだった。しかしオノサトさんが何か感想を言ってくれたかは記憶にない・・・この時のことは帰桐後にお会いしてからも話題にしたことはなかった。

雑誌『季刊版画』9号オノサト版画特集

私が神保町時代に画期的な版画雑誌が出版された。『季刊版画』である。一部のファンで支えられていたがすぐには完売していない。版画入りの500部の限定版と普及版の二種類だった。1968年に創刊され、1号が池田満寿夫特集で普及版は40頁150円という価格からしてその時代が想像出来よう。野田哲也、吉原英雄、駒井哲郎、菅井汲、アイオーらの中にあつて9号のオノサト版画は朱色1色の作品、三木多聞との対談はインパクトがあつた。だが12号の黒崎彰で終刊となっている。

1971年に帰郷し、新店舗の開店に併せて美術出版社の倉庫にあつた9号の残部全てを引き取った。これより桐生でのオノサト版画の普及の始まりとなった。

足利銀行桐生支店に油彩12枚の大作が展示された!

1972年から大作《32コの丸》の内100cm×100cm×12枚600号が、一階吹き抜けの北の壁全面に突然飾られた時の驚きは今も鮮明に覚えている。シマ画廊主の島勝二さんが仲立ちしたこともあり、当時の支店長の熱心さもあって承諾したという。宇都宮の本店に戻った後には撤去されたことと記憶している。もうあの作品が見られないのは寂しい。

オノサト・トシノブ展

玄関横から庭を通り奥のアトリエに直行していた。挨拶だけして数メートル離れて決まった場所の椅子に座る。静かにして話しかけないように。展覧会の打ち合わせなどではいつもこのように訪問していた。



「現代版画の4人の部屋展」オープニングパーティー
左：オノサト 右：奈良

私の企画によるオノサト展は桐生ではシマ画廊、東京の銀花ギャラリー。前橋スズラン百貨店等で企画主催した。なかでもスズランでの「現代版画の4人の部屋展」（1979年5月）は、オノサトさんとアイオー、前田常作、司修の部屋をそれぞれ独立させて個展方式として開催した。オープニングパーティーでは、オノサトさんの挨拶はいつも簡潔だがグサッと刺さる一言がある。終了後に前橋の有村真鐵さんの案内で近くの喫茶店へ行き、オノサトさん、アイオーさんの話は盛り上がり美術以外の話題でそのまま桐生へ行くことになった。

やはり緞帳の「銀河」は凄かった！

当館の第61回企画のオノサト展図録に書いたが少し補則したい。文化センターの為の原画と緞帳の「銀河」誕生には計画から市民募金運動ま



大阪の緞帳織物制作工場

で2年程を要した。この計画にも鳥さんの協力なくしてあり得なかった。

建築計画と並行してオノサトさんとの交渉では「宇宙を想像できるような作品はどうか？」



桐生市文化センターの緞帳中央公民館

と話合った。桐生市との交渉では担当職員の努力なくしては困難だった。桐生市は寄贈という形式を望んだが、作家であるオノサトさんは原画の寄贈には難色を示したが私は予測し理解していた。そして話し合いオノサトさんの協力が得られ両者の合意に至った。

完成の報せを受け、市として正式に挨拶のために訪問した。公用車で担当のI氏と私で見学とお礼に伺い引き取らせて頂いた。その時に彼が「まるで銀河のようだ」との会話で画題は「銀河」で良いのではという事になった。のちに市長室を訪問し、部屋に飾られた原画の前にオノサトさんと小山市長が懇談し、私も立会った。

オノサト・トシノブ芸術の代表作の油彩と緞帳が桐生市に残り、輝く存在になった。

デスマスクのこと

1986年11月30日夜、トモ子夫人から電話があった。通夜の日に新桐生駅に久保貞次郎氏を迎えに行つて欲しいとの連絡であった。久保先生はその日ホテルで弔辞を書いていた。それにデスマスクをどのように造るのか教えてくれる人を紹介して欲しいと。付き合いのあった新制作協会の彫刻家小田襄さんを紹介した。その後電話でいろいろやり取りをして指導を受けたのだろう。夫人の書かれたオノサト・トシノブ伝には、デスマスクのことが記されているので立派に制作されて残っているだろう。しかし私は拝見していない。

12月2日の通夜はやや肌寒く静かなお別れだった。既に35年。

74歳、私も同い年になった。

【研究ノート】

北川實による松本竣介宛葉書2

小此木美代子

前号『ガス燈』129号の本欄では、1935年6月20日付の1通を紹介した。今回は先の葉書から約半年後となる1935年12月13日付、そして1936年5月14日付、7月21日付の3通を紹介する。

竣介は、1935年の1年間に、当時北川が経営していた茶房り、おむにおいて、北川との二人展も含め、計4回の小品展を開催している。資料によれば、茶房り、おむの店内はわずか12.5畳。小さな空間での発表であった。^[註1] それでも23歳の青年画家がこの頃、定期的に新作を発表できる場所があったこと、これはとてもめずらしく恵まれていたことに思われる。同年5月に、茶房り、おむでは、鶴岡政男の初の個展も行われていた。しかし現在知られている資料をみるかぎりにおいては、これほど頻繁に展覧会をしていたのは、竣介のみである。このことは、両者間の親密さを物語るひとつの側面ともいえる。また、竣介の作品に対する北川の共感の現れとも捉えられるだろうか。

さて、ここに紹介する北川から竣介に宛てた葉書は、北川が茶房り、おむを経営し始めて^[註2] ちょうど1年経った頃から、翌年夏のはじめまでの3通である。以下、日付順に紹介する。

1935年12月13日付の葉書で北川は竣介に、個展を春まで待ってほしいと頼んでいる。しかし、この葉書からまもなくのちょうどクリスマスを挟んだ会期12月22日から26日、案内葉書によれば、佐藤俊介氏洋画小品展（素描4点を含む全10点）は開催されている。翌年春頃に会期をずらした記録は今のところ見当たらない。

なお、北川が「毎日、てんでこ舞ひ」であった「雑誌の仕事」とは不明である。

また、この葉書は1929年に開催された第8回仏展〔仏蘭西美術展覧会〕（於・東京府美術館 会期・1929年11月1日～11月30日）に関連して印刷されたものと思われる絵葉書が使われている。^[註3] 絵葉書の左端の断面をみると、数枚を綴じてセット売りにでもされていたものだったか、また、東京芝愛宕町（現在の東京都港区）にあったこの印刷所と北川との関連はあったのかどうか、など調査すべき事柄はまだのこる。今後の検討課題としておきたい。

この葉書からさらに半年後となる1936年5月14日付の葉書は、「中展」に向けての北川の近況が記されて

おり、竣介のことを「俊ちゃん」と呼んで、竣介の制作発表に期待をうかがわせている。「中展」とは、同年5月28日～6月7日に開催された中央美術展を指しているようだ。雑誌『中央美術』^[註4] の記載によれば、洋画第1室に竣介は《或る街》と《商店》と題した2点を、北川は洋画第3室に《風景》と《横濱街景》と題した2点を出品している。なお、前年1935年の同展にも、竣介（佐藤俊介）は、《少年三人》と題した作品を、北川は《駅展望》を同じ洋画第3室に出品している。加えて北川は、水彩室に《花と少女》を出品。同誌に図版掲載され、黒田重太郎による評文に名をあげられていた。^[註5] 以上の出品歴は、この葉書の存在により今回明らかになった。

1936年7月21日付では、「毎度、雑誌有がとう。」とある。この雑誌は、当時、竣介が深くかかわっていた生長の家の月刊機関誌『生命の芸術』^[註6] の可能性も考えられる。一方で、北川自身も1935年12月13日の葉書に記しているとおりの、何らかの雑誌に携わってはいたようだ。そのため「雑誌有がとう」の意味ははかりかねる。

この葉書から約2か月後に開催された第23回二科展に、北川は《河口》を出品して入選した。^[註7] 猛暑のなかに描いていたのが、果たしてこの作品であったのかどうかは特定できていないが、自身の悩みや不安、ときに健康状態までもしたためつつ、日々制作し、発表し、賞を狙う。北川の葉書を通じて、若き日の両者の熱情が、夏の暑さとともに伝わってくるようだ。

註1：茶房り、おむの店内は、北川實が経営する前には、中林政吉が店主であった。店内の様子について、中林の次男・中林啓治氏は、両親からの聞き取りをもとにしたイラストを描いている。このイラストによれば、作品は茶房室内の鴨居の上の壁に掛けられていた。展覧会はどうしても小品展となった。

註2：案内状の存在から、1934年11月から北川の経営であることが分かっている。しかし、この店がいつまで続いたかは現在不明。

註3：展覧会の主要出品作の図版を掲載した第8回仏展（仏蘭西美術展覧会）（1929年）図録には、この絵葉書に採用されたガルノー《テニス》（GARNOT, Andre - Le tennis）のモノクロ図版の掲載がある。

註4：雑誌『中央美術』第36号復興第4年（1936年7月発行）所収の「中央美術展出品目録」による。同展では巖光が《シシ》を出品。中央美術準賞を受賞している。

註5：雑誌『中央美術』第23号復興第3年（1935年6月発行）所収の「中央美術展陳列目録」および黒田重太郎「中展洋画部管見」による。

註6：1933年9月の創刊号から1936年10月の終刊まで竣介は、兄・彬とともに本誌に多数の文章やカットを寄稿し続け、編集にも携わった。発行：全38号。

註7：竣介は北川に先んじて前年の第22回二科展で《建物》（神奈

川県立近代美術館蔵)によって初入選を果たしていた。この年は《赤い建物》を出品している。

※本稿執筆にあたり、葉書の解説、資料のご提供およびご助言を次の方々に賜りました。記してお礼申し上げます。寺口淳治氏(広島市現代美術館)、濱淵真弓氏(岩手県立美術館)、橘川英規氏(東京文化財研究所)。

(当館学芸員)

【北川實書簡

松本竣介宛 消印 駒込 1935年12月13日

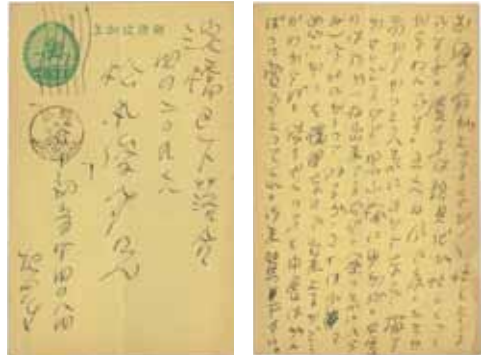
[仏蘭西美術展覧会 ガルノー《テニス》の
図版(東京芝愛宕町・アート社印刷製の葉書)]



元気にお働きの事
と存じます。小生、
雑誌の仕事で、毎日
てんてこ舞ひをやつて
ゐて、兄の展覧会印
刷の事もまだやれぬ
次第。非常に相す
まんが、そんな訳で
個展を春までまつて
下さい。唯し、クリスマス
までに店の絵をとりかへ
たいから二三枚近作を
かして下さいませんか？
万拝眉の上。

【北川實書簡

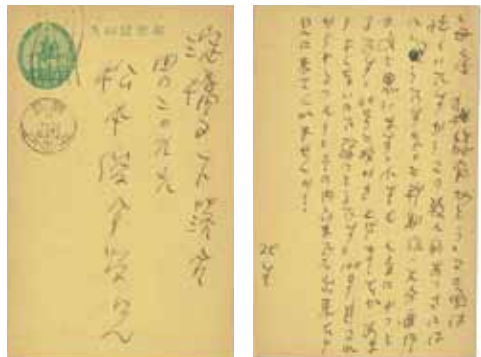
松本竣介宛 消印 駒込 1936年5月14日



お便りがとう。なか、忙しそう
ですネ。僕の方は絵具代が忙しくて
かなわんです。五六日風で床。二三日
前からやつと元気にカットなぞ描いて
かせいどるけど、思ふ様にゆかぬ。中展
のは50が一枚出来てるだけ。(余り気に入ら
ぬ)今60にかゝつてゐるが、これは少々
思い切つた構図なので出来上るかどう
かわからぬ。俊ちやんの方も中展はがん
ばつて賞でもとつてくれ。御来駕下さい。

【北川實書簡

松本竣介宛 消印 駒込 1936年7月21日



毎度、雑誌有がとう。この頃は
忙しいですか？この殺人的あつさには
へいこうですな。二科制作、大分進行
の事と思います。小生も、人並みにやつと
るです。60号二枚かき上げましたが、あま
りよくないので弱つとるです。100号をこれ
からやるつもり。その内ひまでも出来たら
見に来てくれませんか？